



井康隆
は土曜に蒼ざめる



© 1978 Y. TSUTSUI

0093-772153-3041

馬は土曜に蒼ざめる

一九七八年八月二五日 初版発行

一九七八年一〇月三〇日 二版発行

著 者 筒井康隆

装丁者 柳原良平

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

101 東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

電話 出版部 二三〇―六三六一

販売部 二三八―二七八一

印刷所 凸版印刷株式会社

定 価 七八〇円



(落丁・乱丁本はお取りかえいたします)

目

次

横車の大八 七

息子は神様 三五

空想の起源と進化 三九

混同夢 五

逃げろや逃げろ 七一

人類の大不調和 八九

肥満考 九

馬は土曜に蒼ざめる 二五

穴 二四二

夜を走る 二六二

たぬきの方程式 一九三

欠陥バスの突撃 二〇七

ビタミン 二三五

フル・ネルソン 二四五

国境線は遠かった 二五九

著者・おことわり 二八五

馬は土曜に蒼ざめる

横車の大八

「やあ。庄右衛門さん。いましたね」

「ああ、あんたか。まあお入り。あがつといで。なに、今、ちょっと、テレビを見てたんだがね」

「ほう。庄右衛門さんはテレビが嫌いじゃあなかったんですか」

「あまり好きじゃないね。でも、とことん嫌いならテレビを買って部屋に置いとくなんてことはしない。わしが嫌いなのはこの、歌とか野球とかいったやつでな。テレビそのものが嫌いなんじゃないんで。ああ、どうだね。その、今日は、ゆっくりして行っっていいんじゃない」

「いそがしい、なんてことをいうと、また何かいうんでしょう。いそがしがたつてゐる奴ほどたいした仕事はしていないとかなんとか」

「なあに。いくらわしだって、いつも人のことを茶化してばかりはおりやせん。いそがしいなんて、結構なことじゃないか。なあ。人間は若いうちに働いとくもんじゃない。でないと老いぼれてから若いもんの厄介になって窮屈な暮らししかたをせにゃならんでな。老人が若いもんか

ら馬鹿にされぬためには、金を持っておることが一番じやて。わしを見なさい。若いうちに働いて小金を貯めておいたからこそ、年寄りになつてもこうして楽に隠居していられる」

「いいご身分です」

「じゃ何かね、そのう、やつぱり、いそがしいのかね」

「まあまあですな。小説を書くなんて仕事はこれは、いつてみりゃ年がら年中仕事をしてるみたいなんもんで、だから無駄話だつて仕事のうちです」

「それもそうじゃな。そんならまあ、ゆっくりしてお行き」

「テレビ、何を見てたんです。はあ、これですか。何かの建設工事ですな。これは何の工事やつてゐるんですか」

「都市再開発とかで、町のまん中の古いビルヂングをおち壊しとるんじゃない。今、その壊しかたを見とったんじゃない」

「なるほど、パワーショベルで残骸を運んでますね」

「さっきはずいぶんびつくりしたぞ。起重機みたいなものの先つちよに、ふた抱えも三抱えもあるようなでかい鉄の玉をば、分銅みたいに鉄のロープで吊るした機械が出てきたから、さてこいつをどういふ具合に使いよるかとおるうちに、その鉄の玉をばぶんまわしのよう

に振りまわして、力まかせにビルの壁にぶち当ておつた。どえらい音がして壁に穴があいた。わしゃ、ぶったまげた。たいへんな機械ができたもんじゃ」

「だんだん便利な機械ができてきますね」

「いいや。わしゃあの砲丸のお化けみたいなものを、便利な機械じゃとはちつとも思わんな。あれはむしろ野蛮な機械じゃ」

「はあ。機械の中にも野蛮なものがありますか。機械つてのは、どんな機械にしろ、人間の手を使わずに済ませる道具だから、これはむしろ非常に便利なわけで、ちつとも野蛮じゃないと思いますが、あれがどうして野蛮ですか」

「ものを壊すには、壊しかたというものがある。たとえばこのビルディングみたいに、もともと、できるだけ壊れにくいように作つた頑丈なものが相手では、ただ力まかせにぶち壊そうとしても、なかなか簡単に壊すことはできません。これはあたり前の話でな、簡単に壊れるような安物のビルディングなら、もつと早うから自分で勝手に壊れとつた筈で、もともとビルディングちゅうもんは、どんな風雨が襲うてきても、地震津波が起こつても、絶対に壊れぬ建物を作ろうちゅうて西洋人が作りよつたもんじや。そこでそれを力ずくで壊そうと思えばこれは当然、雨風や地震以上の強い力をこいつにかけねばならなくな

る。あの鉄の玉なんてものは、これもどうせ西洋人が考へ出したもんじゃろうが、たしかに人間の労力はまったく使わずにすむ。しかし、ただただ力ずくで壊すように設計されとるもんじゃから、不経済この上もない。動力の無駄使いじゃな。時間的にも不経済じゃ」

「なるほど。壁に穴をあけたつて、壊したことにほんたうというわけですか」

「そりやあまあ、端から順に穴をあけて行けば、これはどんな建物でも最後には壊れる。しかしこれは壊しかたとすれば、いちばん馬鹿げた壊しかたでな。それに、何もかもこんなに粉ごなにしようては、あとで何かに使えるものがあつたとしても役には立たんようになる。これを見なさい。こういうがらくたの山しか残つたらん。この中で何かに利用できるものがあるか。何もありませんが。粉ごなじゃ。そりやあ、さっきの鉄の玉の機械を運転する役目の人間は、ものをぶち壊すのだから非常にいい気持じやろう。ものをぶち壊すその壊しかたが滅茶苦茶であればあるほど、壊す人間はいい気持じや。そのかわり、壊しかたが滅茶苦茶であればあるほど、あと片付けをする人間は苦勞せにやならん。だから、このシヨベル車を運転しとる人間なんてのは、およそ面白くないにきまつとるぞ。もつと頭を使って壊せば、あと片付けも簡単に済む筈なんじゃ」

「すると、これよりもっと他に、うまい壊しかたがありますか」

「無論、ある筈じゃ。そりゃあわしは建築なんてものについてはいまの素人じゃからして、こういう壊しかたがあるという具合に首尾をとのえて話すことはできません。しかしな、ひとつだけ、こういうことはいえるのじゃ。なぜビルヂングを建てる前に、壊すことを勘定に入れて建てなんだかということじゃな」

「いやあ、そいつは無理でしょう庄右衛門さん。誰だって、建てる時には壊れないものと思って建てるわけで、壊しやすいようにと思つて建物を建てる人はいません」

「それがそうじゃない。そもそも頑丈というのと、壊しにくいというのはまた違ふ。特に今のような移りかわりのはげしい世の中では、建物というものはできるだけ頑丈で、そしてできるだけ壊しやすいものでなければならぬ。これはわしが言うたことではないぞ。横車の大八さんが口癖のように言うておつたことじゃ」

「なんですか、その、横車の大八さんつてのは」

「大工の八五郎さん、つまり大八さんじゃ。わしの親父がまだ子供の時分、この町内に住んどつた腕の立つ大工さんじゃ」

「どうして横車なんていわれたんですか。それは渾名で

すか」

「渾名じゃ。なぜそんな渾名がついたかというと、この大八さんという人が、よその大工のした仕事には必ずケチをつけ、ひとの話には必ず半量を入れたからじゃ。つまり、思うたことをすぐ口に出して言わにや氣のすまん性分だったわけじゃ。それだけ正直だったのじゃが、結局はそのためにひとから嫌われてしもうてな。それで横車の大八と呼ばれるようになった。しかしな、この人のいうことは実は、なかなか、決して横車などではなかった。この人はな、そう、むしろ一種の天才じゃった。天才ちゅうもんは、だいたいにおいてその時代の人からは受け入れられず、むしろ嫌われる。この大八さんもそうじゃった。生まれるのが百年ばかり早過ぎた。うん」

「と、いうと、それは、いつごろの話ですか」

「文久、慶応の頃じゃ」

「ずいぶん昔ですね。そんな昔に、そんな進歩的な考え方の大八さんがいたんですか」

「進歩的かどうかは知らんが、たとえば、さっきの話に戻ると、大八さんの話では、昔の大工で腕の立つた人は、みんなそういう考えかたをしておつたというぞ。そして、その証拠には、事実その頃の家——もちろん、すべて日本家屋じゃが——名のある大工の建てた家は、とてつもなく頑丈な癖に、壊す時は至極簡単に壊せたそう

じゃ」

「まるで庄右衛門さんが、直接その大八さんから話を聞いてきたみたいない口振りですね」

「ははは。いや。子供の頃は年がら年中親父に大八さんの話を聞かされとったもんで、わしゃいつのまにか、大八さんに直接会って話を聞いたことがあるような気になつてしもうておる。今でもそうじゃ」

「でもその頃は、今ほど家を壊す必要はなかったんじゃありませんか。だって人間の数が少なかったんだから、おそらく土地もたくさん余っていたでしょうし、だから家が古くなってくれば、また別の空いている土地へ新しく建てりゃよかったわけでしょう」

「そうはいかん。そりゃ、そうした方が安あがりならそうした方がよい。そんな場合もあったじゃろ。しかし人間には、土地への執着というものがあつてな。また、同じ所にいた方が商売上都合よいという場合もある。殊にこの町などは、昔から家がぎっしり建つておつて、空地などはほとんどなかったからのう。壊すのが面倒だから古い家を使い捨てにするなんてぜいたくが許されたのは、さらにもっともつと大昔の話じゃろなあ」

「すると日本には、その、文久以前の比較的古い時代から、壊しやすい家を建てるという伝統みたいなものがあったんですか」

「伝統というとおおげさになるが、まあ、良心的な一部の大工の間にだけは、作法として、あるいはしきたりなり知恵としてなり、あつたんじゃろなあ。しかし大八さんの考えかたの場合は、これより一歩進んでおつたな」

「と、いいますと」

「何というかのう、ま、未来を見ておつた、とでもいおうか」

「はあ、未来。未来なんてものはむしろ、こつちの商売道具ですが、どういう具合に未来を見ておつたわけですか」

「つまり、先の世の中になつてくると、人間の数がふえるから、家の形ががらりと變つてもつと大勢が住めるようなでかい建物ばかりになるとか、建物の流行ができて、そのため新しい型の家もすぐ流行おくれになるとか、しまいには町全体を建て直すような大がかりな工事があたりまえという風潮になるとか、とにかく壊しやすいい家ほど便利になる世の中がくると、こう言うておつたわけじゃ」

「こいつは驚いた。へええ。それはつまり、今やつている都市再開発じゃありませんか」

「ところが当時は、大八さんの言うことをまともに聞かやつはひとりもなかった。みんな大八さんを馬鹿にしておつた。しかし、わしの親父だけは、子供の頃からずつ

とこの大八さんに可愛がつてもううていたし、いろんな話をしてもうておったから、大八さんを尊敬しておった」

「唯一の理解者が子供だったわけですか」

「いや。理解者はもうひとりいたな。棟梁ちやうりやうのひとり娘でお京さんという、これは町内一の美人でな」

「はあ。それじゃ、理解者というよりはむしろ惚ほれていた……」

「ん。たしかに惚ほれていた。というより、大八さんとお京さんは相思相愛せうしあいじゃったそうな。しかしお京さんはしつかりした娘でな、ただ惚ほれていただけじゃない。大八さんの才能をちゃんと見抜いておったというぞ」

「で、大八さんの方は、いい男だったんですか」

「なかなか男前だったそうな。大工には珍しく色が白うてな。背もすらりと高く、印半纏いんはんてんがよう似合うて、今でいうカッコイイってやつじゃ」

「すると、似合いの夫婦だったわけですか」

「いやいや。ついに夫婦めかけにはなれずじまいじゃった」

「あ、可哀想に。で、そりゃまたどうして」

「大八さんが棟梁に好かれておらんだからじゃよ。しかし、この棟梁というのも決して悪い人じゃなかった。少々気は短い、でもよくできた人じゃった。この人は、大八さんの大工としての腕や頭の良さは充分に認め

ていながらも、大八さんが何かといえは横車を押すので、これがどうも気に食わない。とにかくこの大八さんは、身内の仕事にはケチをつける、棟梁の命じたことには必ず一言文句をつけるといった具合じゃったから、皆から煙たがられておった。しかもこの大八さんのいうことには、どれもこれもみな一理あつたから、誰もいい返すことができん。しかしそのために仕事が遅れたりすることが多いもんで、棟梁もこの大八さんをもてあましておったわけじゃな」

「棟梁は、大八さんとお京さんが相思相愛だということを知っていたんですか」

「うすうす勘づいてはおつたらしい。しかしそこはやはり娘を持つ親ごろ、殊にお京さんはひとり娘、養子をとって自分の跡継ぎにせにやならんわけだから、これはどうしても名人気質の大八では具合が悪い、嫌われ者を亭主にしたのでは娘にとつても不幸ではないか、と、まあこう考えたんじゃろうな。腕も男前も大八には劣るが、愛想がよくて人から好かれ、若さの割には人使いのうまい大工の金三郎という男を養子にして、お京さんと夫婦めかけにした」

「はあ。よくある話ですね」

「そりゃ、小説などではよくある話じゃろうが、当人達にとつてはやはり悲劇じゃ」

「ごもつとも。で、大八さんはどうしました」

「棟梁のところをぶいとび出して、独立した」

「はあ。独立して、自分が大工の親方になったわけですか」

「いやいや、独立したといっても大工たちを雇ったというわけじゃない。大八さんが氣むずかしくて文句の多い人だつてことは町内に知れ渡っているから、誰も雇われようとしないうし、だいたいその頃の町場の大工というのは、棟梁とか親方とかいわれていた人のところで数年間修業したのち、自前の手間取職人になるのが多かったわけだな。だから大八さんも、独立してからは一応皆から親方と呼ばれはしていたが、たいてい自分が手間取職人になって働いていた。いわゆる一人親方というやつじゃない」

「ひとりぼっちだったんですか」

「弟子はひとりだけいたな。皆から馬鹿の半公と呼ばれている、少し頭の悪い小僧を家に泊らせ、いつもつれて歩いていった」

「そんなに皆から嫌われていたのに、独立してから仕事の注文があつたんですか」

「たいていは下請のそのまた下請という、なさけない仕事しかなかったらしいが、それでも横車の癖はあいかかわらずというので、そんな仕事でさえ、だんだん少なくな

つてきた」

「やれやれ、氣の毒に」

「ところが、どうしてもこの大八さんでなければできない仕事というのがあつてな。これがつまり、さつき話していた古い家を壊すという仕事じゃ」

「だって、そんなものは、土方の仕事でしょう」

「ふつうはそうじゃ。ところが町場の改築てえやつは工事を急ぐ場合が多い。こんな時、古い家の取壊しを土方に頼んだりすると、とかく土方なんてのは仕事を怠けたがる上、日雇いが多いから、できるだけ時間をかけて一日分でも日銭を多く取ろうとする。これでは大工の現場入りが遅れて具合が悪い。ところが大八さんに頼むと、安い費用で実に早く壊してくれるのじゃ」

「はあはあ。やつと話をもとへ戻ってきましたね。で、どういう具合に壊すんです」

「大八さんは、まず半公をつれてその家を見に行き、ヘソを探した」

「ほう。ヘソですか」

「そうじゃ。家を壊すには、まず、ここが壊すためのヘソだという場所を見つければよいというわけじゃ。たいていの家には、そのヘソを押せば家全体が壊れるという場所が、ひとつはあるというのが、大八さんの理屈じゃった」

「はあ。家にヘソがあるんですか」

「そのヘソは、柱である場合もあり、根太束である場合もあるが、とにかくそのヘソに手をかければ家全体が壊れるようになっていくのが普通だというのじゃ。そしてまた、出来の悪い家ほど、ヘソがあちこちに分散していて壊しにくい、いい家ほど、ヘソが一カ所に集まっているというのが、大八さんの主張じゃった。棟梁のところにいた時も、棟梁や他の仲間たちと言い争いをした原因は主にそれだったわけじゃな。つまり大八さんにいわせれば、家を新築する場合にも、その家を壊す時のことを考えて、壊しやすいようなヘソを作らないういかんというのじゃ。極端にいえば、この、楔をじゃな、一本、こう抜いただけで家全体が壊れるような仕上げをしなけりや、いい建築ではないというのじゃ」

「ええっ。そんな仕掛けをして、もしもその家に住んだ人が、何も知らずにその楔を引っ抜いたらたいへんじゃないですか」

「だから、素人の眼にとまらないようなところへ、それを作らないういかんというのじゃ。そんなややこしいことが出来るかという大工には、それができねえうちは一入前の大工じゃないという返す。そこで大八さん、まずまず皆から憎まれるというわけじゃ」

「すると大八さんは、自分の理屈が正しいことを、壊し

屋になつてはじめて証明したというわけですね」

「そういうわけじゃ。実にみごとな壊しぶりだったというぞ。一番みごとだったのは古道具屋の金蔵という人の家を壊した時じゃったそうな。建ててから六十年しか経っていないのに、関西風の町屋式間取りが不便だとかで建て直すことにした。一日でも早く建て直してくれというので、これを請負った親方が撤去方を大八さんのところへ頼んできた。で、大八さん例によって馬鹿の半公をつれ、家に見に来たわけじゃな。すでに家財道具は持ち出され建具類もすべてとり払われているから、あとは壊すだけじゃ。大八さんしばらくがらんとした家ん中きよろきよろ見まわしながら歩きまわっていたが、やがてにやりと笑ってこういった。

『実にみごとな家だ。家てえやつは、こうでなくちゃいけねえ。この家ならおれは、鋸ひとつと綱一本で壊してやらあ』

そういつて半公に命じ、ほんとに鋸と綱だけを取りに帰らせたんじゃな。この話を聞いて町内の連中、それに大工たち、大八さんがどんな壊しかたをするかてえんで、ぞろぞろ見にやってきた。大八さんは戻ってきた半公から鋸を受けとって腰にさし、綱の片端を半公に持たせて、自分はもう片端を持つてえとな、ふつう関西風町屋は内庭が台所で、下は土間なんだが、そこから中の間